

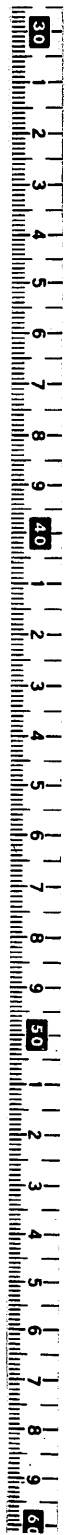
電子複写不可

海上挺進戦隊資料

陸軍中尉 皆本義博

複製史料

防衛研修所戦史室



目次

1. ① 会報第1号

2. 陸軍船舶特別幹部候補生
第2期生会報 第3号
② 特等号

3. 戸次責任長軍隊手帳
(沖縄戦参加)
從軍品収集解除(陸隊帰郷)
証明書
干防接續証明書
引揚証明書(表、裏)
証明書(球美1679部隊表)

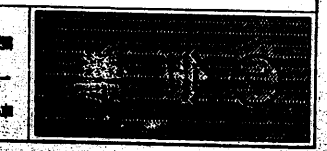
4. 船舶特幹候補生手帳

海上交通戦術、使用之特殊機
 ①、意味
 ②、運送機と特殊機、と略体、

刊行地	東京府大田区神宮町
刊行所	東京府大田区神宮町
刊行日	昭和22年4月20日
刊行号	第1号
刊行部	九州地方 佐賀県佐賀市田代一 中国地方 広島県呉市岸川三 近畿地方 京都市中京区角丸通 中国地方 広島県呉市岸川三

思い出と願い

東京府大田区神宮町
 佐賀県佐賀市田代一
 広島県呉市岸川三
 京都市中京区角丸通
 広島県呉市岸川三



発刊のことば

金原 峯山 作二

（13） 五所一（船中）
 東京府大田区神宮町
 佐賀県佐賀市田代一
 広島県呉市岸川三
 京都市中京区角丸通
 広島県呉市岸川三

文日
 東京府大田区神宮町
 佐賀県佐賀市田代一
 広島県呉市岸川三
 京都市中京区角丸通
 広島県呉市岸川三

海上挺進部隊創設の由来

元才三隊長 中隊長 現自衛隊第6地方連絡部長 皆本 義博

海上挺進部隊は、大東亜戦争末期に大きな期待を寄せられたが、極めて嚴重な企図の下に創設され、ひそかに訓練し、戦いかつ消えて行つた特殊部隊である。世間の耳目に浴びられることはあるが、関係者からいへば、その資料が甚だ少ない特色がある。私は、かつての仕事の関係から、この資料について、その蒐集を敢てしたのであるが、このたび水井氏等第二期生の方々からの御すゝめもあり、私の知っている在古の資料を、紙上を通じて御紹介するつもりである。

技術開発関係 防務庁防務室 藤さん(元陸軍少佐) 株式会社海防局技術部長

技術の精進を網羅して之が対策を常に研究は行はれ且研究又は大規模に於て成功せるものもある。大量生産の他、他業の域に到達せしむる為には幾多の機軸を思慮し、又勿々の間教育に便して訓練の精進を期するものもある等、自ら技術、戦術的にも簡単なものを要求せしむるに到れり。

内山喜太氏 (元陸軍中佐)

我船部隊の手にて処理すべし、航空部隊の予備隊を委任し、可なりや」との熱烈なる意見は、最も重要なる人間関係のものを事前に予備隊に上陸点附近に無数に配置せしめ、敵の上陸に於て上陸点附近より発進し、目前に於て上陸を企図する敵輸送船を攻撃せしむべしとの着想の下に、攻撃せしむべしとの着想の下に、同時条件として、1. なる限りの重量小艇にて上陸し、2. 時速ね二十哩以上なること、3. 敵輸送船を撃沈し得る爆薬の装着可能なること、4. 乗員は一名乃至二名なること、5. 大量生産可能なること、等を示し、船機部を技術的、戦術的研究に従事せしめたり。

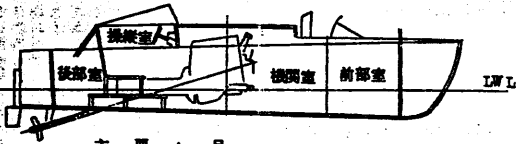
因より、発見せられざる場合に於て十分の敵の砲撃等に抗し得べき準備を有するに非ざれば、攻撃は事実上不可能に陥す。攻撃は、現地各軍は、位置の適定に留意すると共に、決定せる基地は其の配置と掩護の爲、事前に十分の配置を講ぜざるべからず。

4. 攻撃要領 戦隊長指揮の下、高級指揮官の命に基き日没後夜水、既わ三戦隊(百隻)又は一甲隊(概ね三三隻)毎に航行し目標に向ひ、接近の時は別命なく、当該戦隊の基地地帯に進入し、主力をして之を回避せしめつつ、一着目標に向ふ。

成すこととせられたり。一戦隊に対し一基地大隊とし、同一番号のものを組合すこととし、若し戦隊長が基地大隊長より先任の場合には別命なく、当該戦隊の基地地帯に進入し、主力をして之を回避せしめつつ、一着目標に向ふ。

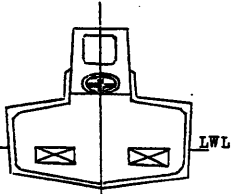
成せられたり。右の内隊より至第十戦隊員は八月十日頃より逐次小豆島の船機特別訓練所補給生隊に要員養成、第十一戦隊以下は八月下旬以降、島津にて要員養成せられたり。

第1圖 「四式内迫攻撃艇圖」



第1表 主要項目

項目	甲一型		甲四型		E型	
	右	左	右	左	右	左
全長	5.600米	5.600米	5.600米	5.500米		
全幅	1.800米	1.800米	1.800米	1.700米		
深さ	0.730米	0.773米				
自重	初期の0.975噸 0.850噸	0.830噸				
満載排水量	約1.450噸	約1.450噸	約1.200噸			
吃水(満載)	0.260米	0.280米				
機関	自動車用ガソリン 機関70馬力	75-80馬力	同	左		
最大出力	20~24馬	23~25馬	25~28馬			
航続力(全力)	3.4時間	同	左	同	左	
兵装	250瓦電雷一箇(甲板上に搭載)					



性能と構造
本艇の主要項目は第一表のとおりであるが、速力は「甲一型」は最初二十節、そのほか出たが、プロペラを変えたりして二十三節まで出るようになり、エンジンの圧縮比を高めることにより、二十四・二十五節出るようになった。「E型」は、速力の点では仲々勝れており、二十六節位出た。使用性能も良く試験の結果も表に示すとおりであった。

外板には耐水性ペニヤ板を用い、底外板には四銃二枚、側外板には六銃一枚、甲板には四銃一枚を使用した。機関は、トヨタ又はニッサンの自動車エンジンを用い、圧縮比を高めて高オクタン価のガソリンを使用し、八十馬力を出した。長時間の冷却には海水を用いた。またオイルパンを二重にして、その間に冷却水を通して潤滑油を冷却した。

クラッチは自動車用のものをヘッドルを通して使用した。操縦は操縦者がハンドルを引くことにより、落下できると共に、艇が衝突した場合には落下できるような装置をとり付けた。

ロケット推進の五式内迫攻撃艇は、その目的からとくに高速が必要である。前述の連絡艇は

速力が不十分であり、しかしいろいろ研究したが重量の可能なものは仲々出来そうもない。そこでせめて無重量の時海面だけを無重量以上の速力で突進出来たという考えから、連絡艇にロケットを取付けることと考えた。

ロケットには、火薬を用いるものと液体燃料を用いるものがあるが、後者の方が推進時間も長かつ性能的にも勝れていたが、実用的には前者が一步進んでいたので、まづ前者を用いることにした。後者の実用価値が向上したらこれに移行する方針で、昭和二十二年五月上旬に此の研究に着手した。

火薬ロケットには、当時噴射時間約二十秒のものが殆んど実用領域に達していたので、これを用いることとした。

しかし、設計から行くと見ると、推力の關係から八〇〇〇位必要なので、その取付位置と重量の増加とで、重量も排水量も増加しエンジンによる推進力が非常に低下するおそれが生じた。また噴射距離もあまり多くを望めなかつた性能としては頗る不満足なものとなることが判った。

しかし、一応これを見て、五月中旬から下旬にかけて四種類の艇を設計し、六月上旬から川崎重工業石川島及川崎造船所で試作に着手した。試作は六月下旬完了したので、直

三式内迫攻撃艇
昭和十八年十月、海軍省海軍部第二部長大尉が、速力五十節位の小型快速艇を作ってくれ、自ら操縦して敵艦に体当たりしたいとその用法も示して中央部に意見具申をした。然し当時の陸軍中央部としては、生還の見込みのない特攻艇を使用することに同意しなかった。ためにこの案は廃棄とされた。

しかし、翌十九年に至って戦局がいよいよ苦しくなると、未だの未だ、改めて敵艦に内迫攻撃して敵の上陸を阻止する考慮を考へることになり、兵器行政本部と技術研究所とでその検討が実施された。この時考えられたものは、速力四十節以上を目途としたもので、これが海軍は数百馬力の高速エンジンが必要となり、これを多量に生産することは当時としては難かしいことであり、然も特攻艇は特攻艇と異り、行動半径が小さいから、多数のものを各所に配置しなればならず、解決策がすぐには得られず、一時この問題は待ととした。

ところが、船舶司令部では、部内の工場にトヨタのエンジンを整備した高速艇を作った連絡艇として使用するのを甲中央に献策して来た。海軍でも艦隊なる特攻艇を作りつつあった。そこでこの間

艦は再燃し、自動車エンジンを用いた特攻艇を作ろうという事になり、急いで内山甲佐の属する第十陸軍技術研究所に、その試作を命ぜられた。これは昭和十九年五月中旬のことであった。

当時の研究所は、船舶専門の研究所として創立中で、多忙を極めるとしてシロクワ落着いて研究出来る態勢ではなかったが、全ゆる困難を克服して研究が実施された。艦の速力は二十節を目途とした。時の余力がないので、船型試験も行わず、設計の出来た部分から試作に取りかかった。

船体の設計は、現小瀬工業の専務小瀬真吉氏が操縦として内山甲佐の下で担当された。

艦の試作は兩國特殊造船で、異常な努力によって設計から試作まで僅か一週間、そのことで完了して五月末には試作艇が完成し、造船所の前で試運転を実施したが、造船所の前の速力と艦体運動が確かめられてはつとめた。

進水艇ではこの図面によって直ちに造船に着手することになり、技術研究所がその技術指導に任ずることとなった。この型が「甲一型」である。

この艇は、百二十瓦電雷を一箇、砲臺席の両側面に搭載し、一箇宛目標に内迫投下後七秒で爆発する仕組みであった。

この第一回の試作に引続いて、更に速力上げるために船型を変えた「甲三型」(ステッパー)、「甲四型」(甲一型を少し変えたもの)等を試作し、十九年八月千葉の岩井近海の海上で海軍の艦隊試験を陸軍中央部の関係官に供覧した。

この結果、総合性能特に耐波・耐波性が良好であるという見地から、第十研究所の試作艇を陸軍として採用することと決定された。

生還の準備は「甲一型」で始められていたが、「甲四型」の方が幾分勝っていたので、生還に支障を来さない時機に「甲四型」に転換するよう考慮された。しかし、今般もなす速力増加について研究を継続するよう要望された。

その後、電雷の担当研究所である第一陸軍技術研究所と船舶司令部とで手詰りの高時九という廠長(五〇〇〇位)に対し水中爆発の突進試験を行ったところ、百二十瓦電雷では効果不十分で、百五十瓦を必要とすることが判った。そのため艦尾に二百五十瓦電雷を搭載するよう改めることになった。

本来、かような試験は艦の設計に先だてられるべきもので、非常事態に陥った場合にのみ生じたものであった。

この影響もあることである。また速力増加のためプロペラの探求も必要だったので、これを確かめるため兵庫県の豊前海上で試験を行った。(当時第十研究所は連絡艇に移転、電雷を海軍試験所としていた)この試験で二百五十瓦電雷は艦尾から六八・二〇種の間に搭載すると殆んど速力に影響を及ぼさなことが判った。又プロペラは直径三〇〇、長さ二三四五のものも量も成程よく、二三三型を確保できることが判った。プロペラの新製状態も仲々馬鹿にならないものであった。

生還は、昭和十九年八月から同十二月迄の間、日本造船、横濱、三浦、南國特殊造船、大原造船、前田造船、水南造船、川崎重工業等で「甲一型」が三千隻ほど作られた。

その後、この艇は一度使用されたら容易に対抗手段が採られるので、最早効果を挙げないとの考えから、一時生産が中止された。しかし、実用して見ると案外効果があるようだし、又これに代り得るものも研究もそう急に出来なかつたので、昭和二十二年一月頃からまた生産が再開された。この時は、大阪方面では「甲四型」が、また日本造船では「E型」が生産された。

らに明石の海岸で試験を行った。試験結果は、巡航速度は予期以上に速く、十節位しか出せなかつたが、噴進の方はどうやら予定位の性能が出ることが確かめられたので、ひとまず研究に区切りをつけることにした。

試験中に、ロケットの取付が不十分のため、ロケットが空甲を噴進する様子を失敗もあつた。噴進機は空甲に置けなく、たのいで、噴進機の下に吸めることにし、噴進機力の強大な有孔注し爆薬を用いた。

（一）艦隊の特攻艇一内山源太氏隊
（二）艦隊の特攻艇一内山源太氏隊
（三）艦隊の特攻艇一内山源太氏隊
（四）艦隊の特攻艇一内山源太氏隊
（五）艦隊の特攻艇一内山源太氏隊

海上挺進隊創設期及訓練の想ひ出

著者 本義博

〇本稿は、記憶及びメモ等から昭和二十九年頃までの海上挺進隊創設期及訓練の想ひ出である。

〇当初益田善雄氏（私の親戚）が「進化する特攻艇」を執筆するに際し、艦隊関係者を私に担当してほしいとのことであつたが、その当時未だ資料をたぐり及ばず、僅かに自分の関係事項を整理しかつた際の際である。

〇このため第二期生会で機関紙の關係事項を掲載されるとのことでお使いいただくこととした。

しむじみとした惜別の情を感ぜずにはいられた。終了式の際、日頃我がが親類として教養を受けていた馬場英少尉の訓示があり、切々として愛着をもつて約二ヶ月間、訓練に専念させていた御氣持が今更の様に感ぜられて、何とも云えない。うれしさと胸が一杯であった。

教育終了と同時に陸軍少尉に任ぜられた船兵の我が同期生佐、みんなで六十五名、此の六十五名が揃って船で四国的小豆島に送られていた。此の小豆島に在りては、船舶特別幹部候補生の才一期が、もつと紡績工場の跡で訓練を受けていた。我々六十五名は此の区隊長に任ぜられる予定になつていり、真夏の焼けつくような暑い中、夏が比較的少なく、換気が充分でない工場跡の兵舎は、ギンギンと汗が流れて一杯と一杯となり、人いざと休中から発散する汗で、しとりとなる位であつた。

我々が、此の紡績工場跡の兵舎に引越して、引越して船舶司令部副長木末中将の初選抜が実施されることになつた。殆ど殆ど一杯一杯と休中から発散する汗で、しとりとなる位であつた。

この選抜は我々にとつては早なる訓練状況視察の程度で考慮されてはいたが、既に此の頃最高統帥の案が考へられ、着々と実況化

る業務が順調に終了した。私もやっと終つた今日の巡視から解放されるよこびを感じて、見送りのために門前に並列していたが、急に部隊長から呼び出しがあつた。この呼び出しは、急いで部隊本部の指示を運ぶが、我々の同期の杉浦、中川の両少尉が矢張り呼び出しを受けて既に待期していらつた。我々も、部隊本部が来て、我々三名は本日付をもつて船舶司令部を命ぜられた事を告げ、直ちに部隊本部に移動の申告をする。昨日着任して本日移動とは、折に折にうらの運動にも似て何だか失笑し度くなるよりの感じが、状況を見れば、司令官が乗って来た船で、艦に上つた。昨日着任して本日移動とは、折に折にうらの運動にも似て何だか失笑し度くなるよりの感じが、状況を見れば、司令官が乗って来た船で、艦に上つた。

あるに此の帆柱の二階の方は森岡としていた、示された部隊長はたぐり及ばず、僅かに自分の関係事項を整理しかつた際の際である。

〇このため第二期生会で機関紙の關係事項を掲載されるとのことでお使いいただくこととした。

びくりとした。此の応接室の外側は、この頃には既に船舶司令部の副長木末中将の初選抜が実施されることになつた。殆ど殆ど一杯一杯と休中から発散する汗で、しとりとなる位であつた。

我々が、此の紡績工場跡の兵舎に引越して、引越して船舶司令部副長木末中将の初選抜が実施されることになつた。殆ど殆ど一杯一杯と休中から発散する汗で、しとりとなる位であつた。

この選抜は我々にとつては早なる訓練状況視察の程度で考慮されてはいたが、既に此の頃最高統帥の案が考へられ、着々と実況化

て兵長に連射した。⑤の勇士連には
もいよいよ出陣で内地をたつ時に
はカラス刀を構えてしよんばり
する者があったとか又輪送船が幸
生を幸いで内地に帰って来た一
この際では時々執事長が墓山
で行なわれた外は金庫の線な墓山
の中で見習士官の組と特務の組と
が降り合せてエンヂンの捜索を
うけた。勿論特務は各甲隊に分散
していたのが捜索の時ばかりに集
まってきた。服装は普通の軍服の
上に上下一緒になった作業服を着
けていた。エンヂンの分解組立を
やったり鍛冶を習ったり旋盤を使
ってボルト、ナットを作ったり技
術兵の道を歩んで来たと思ふ。
勿論機船からの新機件作業とカ
ンカーから修理したドラムカ
を防空壕に運搬する作業もした
し防空壕掘りも夜中にやられた。外
出は広島島の八丁堀あたりをうろ
ついているだけだったが二三四度あ
りた。四月頃にはグラマンが呉軍
港に到着して来るとは聞いていた。
鶴尾の墓山には高射砲陣
地もあったけれども29は広島と
飛来しビラを投下したらしいこと
があった。前は金庫島でドックが
あり海軍の光が夜を色どつていた
鶴尾には暗マ⑤がやっていたこと
もあるし高連隊が警戒されていた
内部をのぞきに行つたりもした
▲ベテラン者が出て一甲隊は編成さ

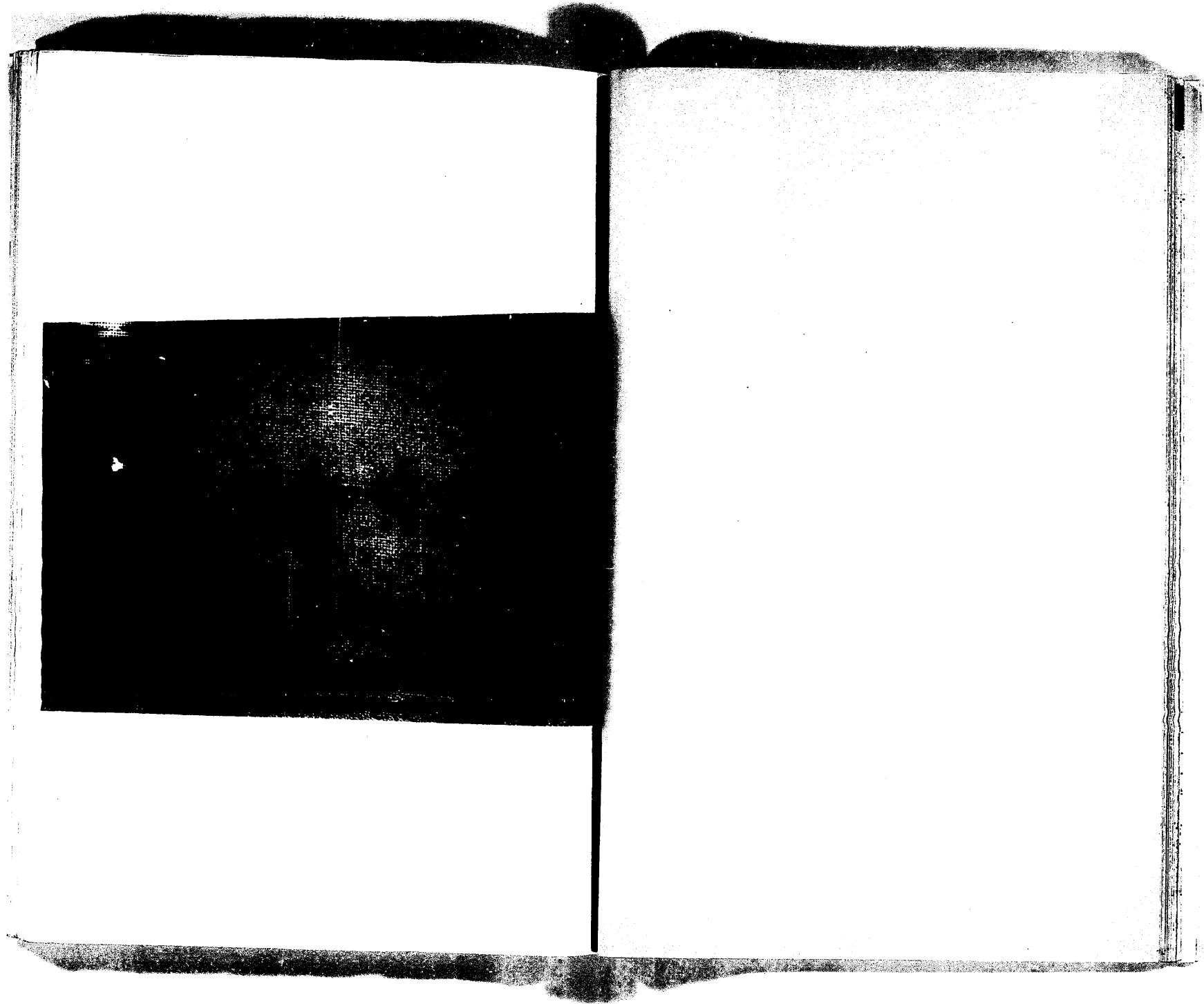
れたことがある。勿論厨師兵が立
たらクレールに両手をつけたさ
数名がビッチリとびらけていた
しと幹が数名のしびりやっていた
たことも思ひ出すし三十四十
の年輩の降級軍の兵隊が八
して来て墓山から松葉のついた杖
を切つて来て當庭に山積し空襲時
に運搬代用に使つたのには驚ろ
いた。現役の初年兵も入隊して来
ていたが⑤の墓地隊にでもなつた
のであろうか。
六月の下旬頃か本土決戦にそな
えて二期生を幸之浦に集め再び
教育が始められた。鶴尾から先発
で幸之浦に半数行つたののそ
中が小生も入つて来た。似の島で
検閲をうけて直ぐ南に見える幸
之浦には金庫島と並んだ龍潭の
兵舎に入つた。勤士防衛隊成とか
言つて岡山、兵庫、大阪出身の者
が三十九歳隊には多かつた。隊長
は幹隊出身の甲島大尉、隊付とし
て陸士出身の重原中尉、各小隊は
小隊長が幹隊の見習士官、班長が
乙幹の班長、特務の二期上等兵五
名が三期上等兵四名で九小隊まで
あつた。
幸之浦で印象のたつたのは鶴尾
投下の突進をみたことと広島河川
船を攻撃目標に夜間襲撃をやつた
ことだ。七月下旬だつたが八月
に入つて来たのか、とにかく原



六甲隊 隊長
船三九補
五三隊
新保正信

再会など考えてみたこともない
夢かと思ふ二期生に出陣できま
しことを出話人の万々に出でた
同期の方々に厚くお礼申し上げ
りつた。思ふは大東亞戦局不利とな
りつた。あつた昭和十九年九月一人
の〇〇が軍隊へ志願する態度も
ある。〇〇の昔々歌流行歌を後に戦時
の〇〇に送られ、小豆島船中特務
隊に入隊。二十年一月和歌山の大
根根隊(船工九補、明けても暮れ
ても汗の突が大根であつた)に転
属し、二十年三月であつた(記
憶)江田島幸之浦に派遣となり
同島で終戦となつた。
〇〇の一年間兵隊生活を通して何
と云つても「原爆」は忘れられな
い。そこで当時こんな様子であ
つた記憶をたどりつゝ書いてみ
ました。
六月八日(昭和二十年八月
六日)午前八時頃江田島幸之浦海岸
(船中練習所)で教育隊(通称
〇〇)艦中特別教育連隊(通称
〇〇)に連日、八月九日から八月十三
日まで作業が広島市の被災復興
救済作業に赴く。二十八年八月
某基地に赴くべく七月下旬から不
格の本夜間演習の日であつた。

たまたま八月六日は連夜の演習で
起床も遅く七時頃であつた。点呼
一点の雲もない澄み渡つた夏の
朝であつた。敵機B二九爆撃機が
二機超高空に銀色を輝かせて飛ん
どつた。そのうち右側機があつた
当時はこんな状態であつた。暫く
して解除となり点呼も終つてそれ
ぞれ朝食前の作業日課にとりか
る。私は船中幸之浦海岸に着用し
てある〇〇の整備に教人であつた。
氏名は忘れてしまつた。この海岸
は幹隊として広島市を一望する事
が出来た。遠く一つない場所であ
る。復員時はこの海岸で〇〇を統
却して操縦は砂浜に埋め仕末を
した場所であり、水泳場でもあ
つた。暫くして舟艇の整備も終
る頃内から轟々と上げ九〇〇「ピ
カッ」と敵機光つた。同時に轟音
と轟音がより無意味のうちに西耳
を押し「ブーン」と轟鳴を起して
艦内に伏せた。同僚もそのように
あつた。場所的にはほとんど受け
た。その因光は「目から火の出る」
表現以上の瞬間の光であつた。目
がくらみ顔は針でさされたよう
な痛みを感じた。敵機は轟音を突
きさす「カッ」と云つた轟音
で「あつた」と叫んだ。あの時
の状況は今でも鮮明から鮮明な
すが、今もって遠くを表現でき
ない。そして



我々代軍隊は世々天皇に統率し給ふ所也
言牌武天皇躬のから大伴物部の兵どもを率
中國のま初ろとぬをのどを討ち平け給ふ
天皇に即ちせりれて天下をわたり給ふ
二千五百有餘年を経ぬ此開世の體の
國の興の期も亦盡ふり

勅 諭



皇太子代ら給ふと給ふと
凡兵權を臣下委ぬ給ふと
至りて文武片制度皆唐國風
六衛府を置き左右馬寮を建
れし兵制は整ひされどを打
扭きて朝廷の政務を漸文弱
のつらら二分れ古の徵兵は
此のつらら二分れ古の徵兵

兵の姿と變り遂に武士と
其武並じもの横染たる者
政治の大權も亦其手に落
家の政治とはを以て權を
ある地人武を以て國をへ
其武並じもの横染たる者
政治の大權も亦其手に落
家の政治とはを以て權を
ある地人武を以て國をへ

是りて其傳事受けぬへき勢に迫りければ朕
が皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宣業を繼
ひ給ひしこそ奈も又惶かに然るも朕切とし
て天津日嗣を受けし切征夷大將軍其政權を返
し大名小名其版籍を奉還し年を経せして海
内一統は世どあり古の制度に復しぬ是文武の
忠臣良將ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖
の專蒼生を憐れ給ひ御選擧なりといへど

併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重
きを知らざるか故よとぞあれされ、此時に於て
兵制を更め我國の光を耀さんと願ひ此十五條
の程も陸海軍片制を以今代様し定むる所を
為し大權の朕に統ふる所を以、其可く御選擧
臣下よは任ぞかれ其大綱は朕親之を繼ぎ
臣下よ奉ぬへきものなり、天子は親政を以て
て篤く斯旨を傳へ天子は親政を以て